2019 年春闘宣言

今日（2 月 15 日）、開催した第 132 回臨時大会で私たち出版労連は、賃上げ、労働条件・労働環境の改善によって暮らしを守り、出版産業新生の展望を拓く気持ちを共有しました。

「官製春闘」という言葉がありますが、賃上げが労働組合の要求と運動、真摯な労使交渉の結果であることは言うまでもありません。出版労連も 18 春闘で、組合平均 6333 円の賃上げ、20．9 割の一時金をかちとりました。産業状況が厳しいからとあきらめてしまえば、優秀な若者がこの産業に入らず、働き続けることも難しくなり、産業全体にとってマイナスです。賃上げ、労働条件・労働環境の改善は産業新生の“不可欠なピース”なのです。

労働条件・環境の問題では、長時間過重労働の解消とハラスメント撲滅が喫緊の課題です。2 つの課題が焦点化したきっかけは、電通での過労自死と財務省事務次官のセクハラで、どちらもメディア関連産業で働く仲間が犠牲になり被害に遭った事件です。

もう、これ以上黙っているわけにはいきません。私たちは、日本マスコミ文化情報労組会議や国民春闘共闘に結集する仲間たちと手を携え、組合に入っていない人たちのこともおもいながら、すでに課題解決への一歩を踏み出しましたが、この春闘でさらに前に進みます。

今臨時大会では、27 代議員が発言し討論が交わされました。

・セクハラ・パワハラをなくしていく課題については、多くの教訓的な発言がありました。「形だけにさせないことが重要だ」
「管理職が暴言を吐いたり圧迫面談をしている可能性が高い。働きやすい職場にするため、会社に検証させ具体的改善策を求めたい」
・組合活動内の発言についても切実な指摘があり、真摯に考え受け止めるきっかけになり、組合活動においてもハラスメントをなくしていく決意を分かち合いました。

・取次職場で女性更衣室にロッカーを獲得した報告に加え、「若い非正規の仲間が組合を自分たちの手でつくっていこうとするのを目の当たりにして頼もしく思い、連帯感も感じた」との発言があり、「自分たちの闘いで賃上げかちとる決意なので、支援をお願いします」との当事者のメッセージも紹介されました。他の単組からも「モチベーションが上がれば、業績にも結び付く」と均等待遇を進める発言がありました。
・常駐フリーについて、実際の相談例にふれながら「みなさんの会社にいる場合、いきなり切れないよう要求を出してほしい」との発言がありました。

・経営再建中の組合から、現場の疲弊に向き合おうとしない経営の姿勢への怒りや失望があるとの報告と、それを打開しようとするおもいが語られました。
・定年延長について「Q&A を配って説明し単組大会で議論するなか、意識が高まりつつある」など、多くの発言があり、今から取り組む意味を考えました。

・改憲の動きに関連して、「憲法は国の骨格で、これが崩れたらおしまい」との発言があり、また憲法問題対策本部に出ている 20 代の組合員から、「若い人がいないのもどうかを引き受けた」とし、ちばてつやさんの講演会企画への参加の呼びかけがありました。

これらは、代議員発言の一部ですが、19 春闘でかちとるべき要求と課題は明確になりました。同時に、それを“かちとる力”についても深く考えることができました。

日本社会では今、忖度が横行し、声を上げることを嘲笑する空気があります。私たちは、そんな空気に一石を投じたいと思っています。

権利や要求を語る、職場で力を合わせる、職場をこえて手をつなぐ。自分たちの活動を振り返る。その連なりが、一人ひとりが大切にされ、もう少し働きやすい明日につながることを、この 19 春闘で示し、産業の内外に広げていきましょう。

2019 年 2 月 15 日
日本出版労働組合連合会　第 132 回臨時大会